内容は巻一―六が庶民向けの家庭医学・看護全書、巻七―八が重誠自身の経験も混えて産婆に向け図解により書かれた専門書である。その内回転術の記載は、私見では本邦最初で、画期的な書物というべきである。各巻の内容を強いて簡略に表わすと、巻一〔養生・看病〕巻二〔食〕巻三〔育児〕巻四〔素人向け産科〕巻五〔感染〕巻六〔救急〕巻七〔産婆向け産科正常篇〕巻八〔産婆向け産科異常篇〕となろう。今回の『病家須知』では前篇（巻一―四）を上、後篇（巻五―八）を下の二冊としている。因みに『日本産科叢書』所収の『坐婆必研』では、巻七―八と共に巻四を「坐婆必研前書」として加えている。

このように今後出版されるこの種の本のモデルになるような本書であるが、全く問題点がないわけではない。評者としては心苦しいが、敢えて触れさせて頂く。

一つは賀川流の回生術の鉄「鉤」を「鉗子」としている点（上・二八九頁）である。胎児の穿頭・切胎による胎児縮小術後に牽出する回生術で使用するのは、二本で挟んでひき出す鉗子（forceps）ではなく、鉤（hook）で、その形は『日本産科叢書』七六四頁の図や酒井シヅ著『日本の医療史』の図四二に見られるようなものである。賀川玄悦が最初に用いたのは竿秤（さおばかり）の品物をかける鉤とされているが、秤鉤については張子和（一一五六―一二二八）の『儒門事親』（一二二〇頃）巻七に既に記されていることが、佐伯理一郎の『日本女科史』に述べられている。当時の玄悦はもちろん知らなかったであろう。現在図によって知られている形は秤の鉤そのものではなく、その後改良されたものと思われる。しかしこの形はSmellie『解剖図譜』（一七五四）の鉤に酷似している。

もう一つは「産椅」（下・二四四頁）で、産椅子としてしまうと西洋で産婆の商売道具にもなった分娩椅子と同一視されやすい。しかし産椅は産後に使用されるもので、腰掛けではなく、膝を折り曲げて坐るもので、出産には使えない（緒方正清著『日本産科学史』一一五頁図、一一六頁図）

以上産科医の立場からの専門批評であるが、全体からみれば、さして大きなことではない。

今回の『病家須知』の出版により、所期の看護面のみならず、産科面でも研究がますます深められることを願って、刊行に没頭された方々に敬意と謝意を表したい。

（石原　力）

〔農山漁村文化協会、東京都港区赤坂七丁目六―一、二〇〇六年九月三〇日、価格二九〇〇〇円〕

秦　温信　著

『北国から、さわやかな風を』

副題は「医療・保健・福祉の原点を求めて」となっている。著者の秦温信先生は札幌社会保険総合病院（以下、社保総合

病院と略す）の病院長である。激務のかたわら執筆し、二〇〇五年七月にB六判一八三頁の本書を出版した。秦温信先生は北海道大学大学院（外科系専攻）を修了、北大第一外科で研鑽を積み、フランス政府の給費でサン・ドニ病院（パリ大学）に留学した。留学というとアメリカを連想するが、フランスに留学して発見したことが本書のなかで随所に垣間見ることができる。

内容をみると、序章「神の館に魅入られた日本人」ではパリで万国博覧会、神の館を見た日本人医師、夜明けの雷鳴との出会い、凌雲北の大地に向かう、人道主義の精神、パリで出会った日本人、経験とは何か、の各項目からなっている。高松凌雲は慶応三年（一八六七）パリ万博使節団の随員としてパリに滞在中、ホテル・デュウ（「神の館」の意、パリ市立病院）で医療技術を学び、さらに医療をとおして人間愛を知った。箱館戦争では敵味方関係なく治療しそれを実行した。

第一章「きららかな北極星（北辰）のごとく」では病院の名称に見る歴史、新さっぽろ副都心に建つ、会津藩の悲劇、名著『西医学東漸史話』、千年の史眼がその内容である。著者の勤務する社保総合病院のルーツは関場不二彦が設立した北辰病院である。不二彦は東大スクリバ外科医局から明治二五年（一八九二）札幌病院（明治二年開拓使により設置）に赴任した。しかし翌年には病院長を辞し開業した。官から民へ大きく人生を転換した。その後不二彦は名実ともに北の巨星として各界で活躍し、名著『西医学東漸史話』を執筆、後生に名を残した。社保総合病院は都心部の北辰病院の地から副都心さっぽろに移り、地域の基幹病院として重要な役割を果たしている。著者は不二彦の名著『西医学東漸史話』について新史料を数多く発掘し、各学会にて発表している。

第二章「禁煙から変わる地域の保健・医療」では百害あって一利なし、受動喫煙の危険性、禁煙のコツ、喫煙者の弁明、医療現場における禁煙の現状、全面禁煙への取り組み、禁煙外来、禁煙ミレニアム、厚別区からの場外ホームラン、市民公開フォーラムの各項目からなっている。社保総合病院は公的病院として全国で最も早く敷地内全面禁煙に踏み切った。その禁煙運動に込めた願いと実践を語っている。

第三章「医療連携の中核として」では医療連携とは何か、地域医療の中核「医療連携室」、「医療連携室」の旗揚げと活動実態、プライマリ・ケアの重要性、ナイチンゲールと保健・福祉、患者さんから医師会への注文、狩勝峠を越えての内容である。札幌市の中でも社保総合病院は公的病院として熱心に医療連携に取り組んでおり、その活動と現状を保健・福祉と絡めながら論述している。

第四章「リスク（セイフティ）マネジメント」では航空事故と医療事故、一患者一カルテ制、カルテ開示はインフォームド・コンセントのツール、安全管理は小さな目配りから、カルテ記載のセイフティ・マネジメントがその内容である。コンピューター・システムの問題、一患者一カルテ制を取り入れ、北海道で最初に情報開示に踏み切ったことなどの意義

について語っている。

第五章「蘇るガン手術法」ではノン・タッチ・アイソレーション法、腹腔鏡手術の流行、高度先進医療としての抗ガン剤感受性試験の認可、ターンブル理論の時代背景、やわらかい脳とかたい脳の各項目からなっている。著者は一流の外科医としてガン治療方法についての考えをもっており、その提言をしている。また医師は右半球の「やわらかい脳」による発想や施行が希薄であるとしている。そして「やわらかい脳」を発達させ、教養と広い視野に立ち、柔軟に考えることをすすめているが誠に同感である。

終章「医療人のあり方とBUSHIDO」ではBUSHIDOとは生きることと見つけたり、BUSHIDO海を渡るの内容である。温故知新、明治期の日本を支えた伝統的な武士道精神から医療人として学ぶべき点について論じている。本書の圧巻である。

本書は専門書ではない。著者は関場不二彦の遺志をひきつぎ「北国から、さわやかな風を」を地域の人々に送ることを目指して執筆した。広い視野、高い教養をもった著者秦温信先生が医界で活躍されることを大いに期待したい。

（島田　保久）

［悠飛社、〒一六五―〇〇三四　東京都中野区大和長一―六七―六　MT COURT、電話〇三―五三二七―六〇五二、定価一六〇〇円＋税］